

人生の歯車が狂うと、精神の歯車も狂う。

小保方晴子（理研ユニットリーダー）が主筆する『STAP 細胞』論文の主要著者の一人で、小保方晴子の後見人だった笹井芳樹（理研発生・再生科学総合研究センター・副センター長）の自殺は、その象徴例だろう。

二〇一四年は「狂気」の事件が相次ぐ。

「佐世保高一女子惨殺事件」の、加害者の少女の「人を殺したい欲求」「人の解剖をしたい欲求」は、少女のみの専売特許ではないが、思うことと実行することは違う。

この事件は、一九九七年の「神戸連続児童殺傷事件」別称「酒鬼薔薇事件」に酷似しているが、さらに遡れば、戦争末期（一九四五年）に、九州帝国大学医学部内で起きた「米軍捕虜・生体解剖事件」に原型がある。

当事者の回顧録を読むと、「戦争中だし家族も殺された敵国の連中だから」とか「どうせ死刑に処せられる捕虜だから」とか「軍部の許可が降りたから」とか、弁解に終始しているけれども、根底には「人を殺したい欲求」と「人を解剖したい欲求」がある。

**戦争という状況は、人生の歯車を狂わせ、精神の歯車も狂わせる。**

**今日の状況も、或る意味戦争なんだろう、いやこれも戦争なんだ、人生の歯車が狂い、精神の歯車が狂う。**

遠藤周作の『海と毒薬』はこの「米軍捕虜・生体解剖事件」をモデルにしているが、登場人物が狂っているのか作者が狂っているのか、どちらが狂っているのか、素人には解らない。

それなら玄人には解るのかと云うと、どちらも狂っていると解る。

驚く必要はない。

必要がなくても驚く者には、魯迅の『狂人日記』を勧めたい。

その前に、今回も池田晶子の言葉を取り上げる。

【私には、凡百の臨死体験なんぞより、臨生体験、自分がいまこの生に臨んでいるということのほうが、はるかに理解し難い不思議である。】

死に臨むのも狂った感覚が得られるが、生に臨むのも狂った感覚が得られる。

こういうことは素人には解らないのだが。

狂っている事実は、犯罪者を無罪にするが、それならば日本人全員、どんな犯罪をやっても無罪となる、なぜなら日本人全員が、「大」なり「小」なり狂っているからである、そうしてその「大」か「小」かを見極める事は、現代の最先端の医学や心理学をもってしても、困難なのである。